

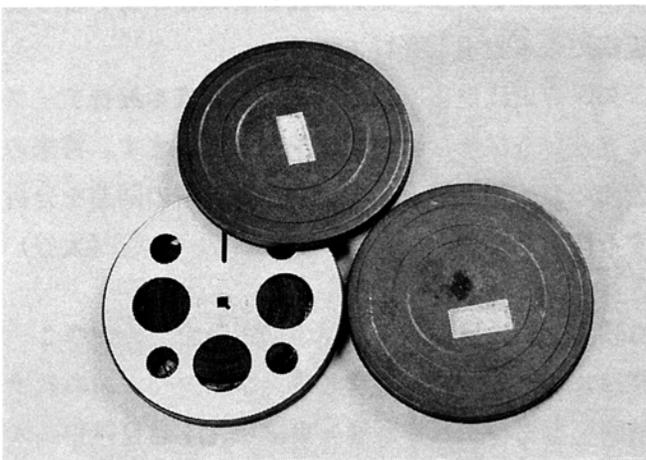
## 久保寺逸彦文庫の映像資料

昨年の春、当センターへ寄贈された「久保寺逸彦文庫」の概要については前号でもお知らせしました。今回はその中から映像資料についての整理とその内容について報告します。

### 《整理と複写作業》

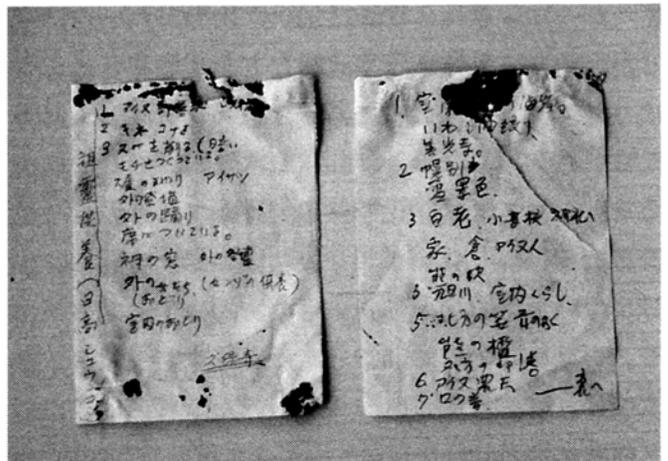
久保寺逸彦文庫は、東京国立博物館の佐々木利和氏を中心として予備調査が行われ、仮番号が付けられた約4,080点の資料は6月に当センターへ搬入されました。録音テープや映像フィルム、写真を「音声・映像・写真資料」として仮分類した中に映像資料が20点あり、その内の3点は他の資料を複写したものであるため、それを除く17点を保存処理しました。

ひとつひとつの資料が丸い缶ケースや紙箱、ビニール袋などに大切に納められていたので、ホコリやカビの付着もなく、フィルムの物性が劣化して切れているということもない良好な状態に保たれていました（写真1）。



〔写真1：缶ケース入りの16ミリフィルム〕

そのため清掃作業は順調に終わることができました。これらは主に、16ミリフィルムで撮影されていたので、デジタルベータカムテープ、8ミリビデオテープ、VHSビデオテープの三種類の媒体に複写した後、それを用いて改めて内容の確認と関係資料の突き合わせの作業に入りました。



〔写真2：缶ケースの中にあつたメモ紙〕

久保寺氏は、撮影場所や被写体について大まかに記したメモ紙（写真2）を半数近くの映像資料に付けていましたが、撮影年月日について記しているのは1点だけでした。しかし、実際に再生した画面上のテロップには、さらに詳しい撮影状況と撮影年月日が映し出されるものがありました。そのようにして特定できた撮影年月日と同じような時期に書かれた文書資料を調べると、そのテロップと同じ文面のカードが出てきたり、調査ルートの宿泊場所や利用する交通機関などが詳細に書かれたノートも残っていました。これらの文書資料の整理は、「久保寺逸彦文庫」の図書資料を整理した後に本格的に取りかかる予定です。

## 《撮影内容の概要》

映像資料の調査は、まだ調査の途上ではありますがその一部を紹介します。

1934（昭和9）年8月の平取町紫雲古津における鍋沢コポアヌ家の「祖霊供養」が1点、1935（昭和10）年の7月下旬から9月上旬にかけての「北海道・樺太調査」が8点、1936（昭和11）年3月下旬の平取町二風谷においての「熊送り」が5点ある他、撮影時期のはっきりとしないものが1点だけあります。しかし映っている人々や建物などを観察すると、やはり他の資料と同じ頃であると思われます。久保寺氏は、1934年以降の4年間、日本学術振興会の助成金をもとにアイヌ文化を採録調査しており、自らが撮影機を操作していました。映像の録画時間は、1分少々短いものから長いもので20分半のものがああり、合計すると3時間37分になります。映像フィルムには、音声は記録されていません。音声は、撮影と同時に別の装置を用いて採録しているらしいので、今後の調査によって、それらを合致できる可能性があります。

「祖霊供養」と「北海道・樺太調査」には、久保寺氏の師である言語学者の金田一京助氏と平取町の二谷国松（1888-1960）氏らが同行しています。二谷氏は日高の沙流川筋において、アイヌの祭祀儀礼に通じた人として有名な方であり、「熊送り」の撮影では、自宅を撮影場所として提供し、自らも家の主人として儀式を執り行っています。久保寺氏の著書『アイヌ叙事詩 神謡・聖伝の研究』（1977、岩波書店）の序文には、研究調査に幾度も関わった二谷氏に対して、「知友」「恩人」と称しながら「どんなに感謝していいかわからない」と深い感謝の言葉が述べられており、久保寺氏が寄せていた信頼の大きさが伝わってきます。

久保寺氏は「北海道・樺太調査」における研究成果を数々の著作物に報告しており、前述した著書と『アイヌの文学』（1977、岩波新書）、『アイヌ民族誌』（1979、第一法規）の中で「アイヌ文学の発生基盤が巫女の託宣歌にある」という金田一氏の考えを継承・発展させた学説を展開しています。この際の裏付けとして、必ず紹介されるのが樺太の東海岸において見聞したシャーマンの行事です。映像資料には、巫女が太鼓を打った後に「神憑って無意識の状態」になる様子が映され、動作の実際を見ることが出来ます。樺太においての撮影では、他にトンコリ（アイヌの弦楽器）を演奏する女性の姿もあり、その伴奏で複数の女性が踊るという貴重な映像も含まれています。

全体的に屋外での撮影が多いのは、露出の問題があったためだと思われ、村の風景や家、野外で働く人々の姿などがよく映っています。御幣削りなどを屋内で撮影する際は窓からの採光を利用する工夫が見られます。

「久保寺逸彦文庫」の全体に比べると、映像資料の数は少なく感じられるかもしれませんが、しかし、これらの全ては昭和初期に撮影された古いものばかりであり、当時のアイヌの生活や伝統的な儀式、踊りに参加する人々の細かな仕草を一連の動きとして観察できる貴重な資料です。

久保寺氏は他に原稿やノート、写真や録音テープなどという様々な形の記録を残しています。将来の公開のための準備として、これら資料の関連を分析する作業が重要といえます。（大谷）

## 幕別町蝦夷文化考古館文書資料 の調査を終えて

十勝管内幕別町の千住、帯広から釧路に向かって国道38号線を走るとちょうど途別川を渡ってすぐのところに、幕別町蝦夷文化考古館があります。小ぢんまりとしていながら独特のスタイルが印象的な建物です。この地に生まれ育ち、幕別町議会議員や北海道アイヌ協会副理事長などの公職を歴任した故・吉田菊太郎氏（1896～1965）が、「先住民アイヌの先祖に対する<sup>はなむけ</sup>餞として<sup>は</sup>持た又向後の考古資料にも役立てよう」（「アイヌ文化考古館建設について御願い」1958年）という目的をかかげて、自ら民具などを収集し寄付を募って1959（昭和34）年に建立したものです。氏の没後は幕別町教育委員会の管理となり今日に至っています。



【写真3：幕別町蝦夷文化考古館】



【写真4：文書資料の一部】

この蝦夷文化考古館の所蔵する資料のうち、既に民具等については幕別町教育委員会により『吉田菊太郎資料目録Ⅰ』が編集・発行されています。同館にはこのほかに、吉田菊太郎氏が受け継ぎ、あるいは収集した文書や図書などの資料が数多く保存されてきました。これらの調査・整理を行うために、

1995（平成7）年度から町教育委員会による幕別町蝦夷文化考古館文書資料調査委員会が発足しました。委員は、小助川勝義（委員長：帯広市立森の里小学校教頭）、内田祐一（帯広百年記念館学芸員）、湯佐茂雄（幕別町教育委員会郷土文化係長：平成9年度から）、山田伸一（北海道開拓記念館学芸員）、小川正人（当センター）の5名です（職名等はいずれも現在のもの）。

そしてこのほど、3ヶ年の調査期間を終え、調査報告書（『吉田菊太郎資料目録Ⅱ』）を刊行するとともに、3月7日、その報告会を兼ねたアイヌ文化講座を幕別町にて開催いたしました。

この度の資料調査では、既に蝦夷文化考古館から幕別町ふるさと館に移されていた文書・図書資料を中心に、蝦夷文化考古館に残されていた図書、文書、写真など合わせて約850件（細目を含めると約3000点）の資料を確認しました。

これらの資料の特徴は、先ず何といたっても吉田菊太郎氏自身の様々な活動や学習の経過に沿って蓄積されたものだということにあります。戦前の十勝アイヌ旭明社や北海道アイヌ協会に関するものなどの稀少な資料があるというだけでなく、吉田氏による様々な書き込みや整理のあとがうかがえる点でかけがえのないものだと思います。もう一つの特徴は、土地の下付や市街地の形成など、明治中頃からの幕別・十勝の地域史にとっても重要な資料が多く含まれていることです。このため、調査では、資料ごとの表題や編著者名はもちろん、形態上の特徴や内容のあらましなども記録するようにし、主要な文書などは活字化し、併せて道立文書館等が所蔵する関連文書や当時の新聞記事などの調査も行いました。

『吉田菊太郎資料目録Ⅱ』は、前半に今回調査した資料の目録と解説を、後半に吉田菊太郎氏関連の主要な写真と文書を掲載しました。この目録は関係機関等に配布するほか、幕別町蝦夷文化考古館にて有償頒布する予定です。（小川）

## アイヌ語に取り組む

当センターには、アイヌ文化に関しての様々な問い合わせが寄せられています。毎月20件以上の質問がある中、アイヌ語に関する質問が約4割を占めています。今年度、アイヌ語についての質問を数多く寄せている登別アイヌ語教室の上武和臣さんにアイヌ語を学ぶようになった経緯や苦労した点などを語っていただきました。

\* \* \*

北海道ウタリ協会登別支部の会員として、地元のアイヌ語教室の運営に関わってから3年になろうとしています。いつも手探り状態で授業を続けています。支部の動きに若干触れながらアイヌ語について気のついたことを述べたいと思います。

私たちの支部は、昭和21年の北海道アイヌ協会の発足と同時に設立されました。しばらくは活動も停滞していましたが、20年ほど前から野球大会やキャンプなどのレクリエーションにより活性化しました。その後、会員の一人が子供時代の記憶をもとに、木枝を編んで作るラオマップという仕掛け罠について話したことがありました。登別でも明治の末期まで行われていたといわれる漁法です。それを復活させたい気運が会員たちに盛り上がりました。道具の制作方法を習得して、昭和62年から「ラオマップ カムイノミ」と名付けた鮭を迎える儀式を始めました（平成9年度から「登別ベッカムイノミ」と改称）。



〔写真5：ラオマップを仕掛ける登別支部の会員〕

儀式には神々や先祖の世界へ送り届けるご馳走が必要なので、豆やカボチャを混ぜ煮したラタシケブ、ジャガイモの団子にイクラをまぶしたチポロシト、イナキビご飯などという伝統的な料理を学び、民族衣装も自分たちで作り上げるようになりました。

その後の私たちは、カムイノミ（神への祈り）を、下手であってもいいから、心を込めたアイヌ語で祈りたくなり、平成7年度から自主的にアイヌ語教室を始めました。初年度は主に「祈り言葉」を、2年目は「日常会話」をテーマにしました。

登別付近で話されていたアイヌ語の記録が少なかったため、比較的資料の豊富な沙流方言の文章から、『アイヌ語方言辞典』（1964、岩波書店）を参考にして単語を登別方言に置き換えて教科書の作成を目指しました。しかし、ただ単語を置き換えても本当に正しいのかどうかの自信が持てず、アイヌ民族文化研究センターへ質問するようになりました。文章が誤っているかどうかの直接的な回答だけでなく、まずは利用できる文献やアイヌ語の表記や発音について教えられました。

徐々に文法についての話に移行しました。聞き慣れない「人称接辞」という用語についての説明を受けたのもその頃です。一つの例をあげると、アイヌ語辞書には「イベ」が「食事する」という意味で載っています。しかし、辞書にある単語は「彼、彼ら、それら」というような第三人称の立場の人の動作を表しているにすぎません。自分の動作として表現する場合、「私が」を意味する「ク」を付けて「ク・イベ」とする必要があります。「あなたが食事する」と言うときは「あなたが」を意味する「エ」を付けて「エ・イベ」とします。このような人称接辞を習得することでアイヌ語辞書をもっと活用できるはずです。

アイヌ語を「学ぶ」という動詞にも「私が、私たちが」という第一人称接辞を付けて、自分たちのこととして地道に取り組みたいと考えています。

## いくつもの虹

澤井 春美

数年前のある日、ぼんやりと外を眺めていたら虹が出ていた。側にいた人たちに「きれいな虹が出ているよ」と私は窓の外を指さした。一人ではしゃいでいると、ある人がアイヌにとって虹というものは恐ろしい存在なのだと話してくれた。

\* \* \*

日高・新平賀村の伝承<sup>(1)</sup>によれば、虹は下天を鎮する神の妹であったが神罰を受けて魔物にされた。人を見かけると追いかけてくることがあるので、その時に唱える呪文が記録されている。同じ日高の荷負本村の西島テルさん<sup>(2)</sup>によると、昔々ラヨチという娘がいて、嫁に行く前に母から下帯を作ってもらい、それを着けて嫁に行くのが習慣であったのに、親の言うことを聞かず、色々な色の絹でそれを編んだので、怒った神様が娘を懲らしめようとして虹にしてみました。だから天気の良いのに雨が降るとラヨチが悲しくて泣いているのだと言われていたという。

千歳市の小田イトさんと白沢ナベさん<sup>(3)</sup>によれば、虹を指さすと指が腐るとか、指させば追いかけて来るから指さすものではないと言われたという。虹が出たら、追われないように虹に向かって鎌で切る真似をし、また土の上に虹を描き棒で切る真似をするとよいのだそうだ。

十勝・本別町の沢井トメノさんは、虹をラオチまたはカムイリウカ（神様の橋）という。神様がある村で雨を降らせ、虹の橋を渡って、またどこかで雨を降らせる。虹は魔物でもなく怖いものでもない。旭川でもカムイリウカ（神様の橋）という単語がある<sup>(4)</sup>が、杉村京子さんにお聞きしたのは、「虹は化けものなので、指をさすものではない」というものだった。虹のアイヌ語名は、新平賀、荷負本村、

千歳、静内でラヨチ、本別と釧路<sup>(5)</sup>ではラオチである。アイヌ語と一口に言っても、大きく樺太、北海道、北千島、東北北部の方言に分かれ、さらに北海道内でも地域によって多少の違いがある。例えば虹を表す単語は似通っているが、伝承の内容は前述のように様々である。

アイヌ文化に関しては、調査・研究が比較的進んでいる地域とそうでない地域がある。現在、地元の伝承も資料もあまり残っていない地域では、研究の進んでいる他の地域から、言葉や伝承を学ぶことも多いと聞く。しかし、そのような状況にあっても、数多い資料からようやく見つけた地元の伝承を学ぼうと努力する人々もいるのは事実である。一地域の情報にすぎなくても「アイヌの伝承」としてひとまとめに紹介される場合も少なくないが、伝承には地域差があって然るべきであり、これを無視したり、無理に統一する必要もない。情報量に関係なく、地元の伝承を大切に引き継いでいきたいという声も多い。

\* \* \*

それにしても各地の虹の伝承を知らずにいたら、虹が出るたびに人前ではしゃいだりして、多くの人に迷惑をかけていたかもしれない。

伝承の地域差と方言の区域との関係についての総合的な調査もまた急がれる。

(1) 知里真志保『知里真志保著作集2』平凡社1973(P16)

(2) 北海道教育庁社会教育部文化課編『昭和62年度 アイヌ民俗文化財調査報告書(アイヌ民俗調査Ⅶ)』1988(P50)

(3) 北海道教育庁生涯学習部文化課編『平成元年度 アイヌ民俗文化財調査報告書(アイヌ民俗調査Ⅸ)』1990(P80)

(4) 服部四郎編『アイヌ語方言辞典』岩波書店 1964

(5) 吉田巖『北海道あいぬ方言語彙集成』小学館 1989

## 平成9年度後半の主な動き

〔10月〕

- ・第115回日本語学会（京都市／参加：澤井）
- ・第41回教育史学会（福岡市／発表：小川）
- ・道南ブロック博物館研修（熊石町／講師：古原）
- ・アイヌ文化教室  
（白老町、アイヌ民族博物館主催／講師：甲地）
- ・第2回センター運営協議会

〔11月〕

- ・歴史民俗資料館等専門職員研修会  
（佐倉市／参加：大谷）
- ・北海道ウタリ協会登別支部講演会  
（登別市／講師：谷本）

〔12月〕

- ・平成9年度教職員経験者（高等学校）研究協議会  
（札幌市／講師：谷本）

〔1月〕

- ・第3回センター運営協議会
- ・共同研究「カムチャッカ半島民族芸能調査コリヤクとアリュート」（ロシア連邦共和国／参加：谷本）

〔2月〕

- ・平成10年度JETプログラム北海道地区中間研修  
（札幌市／講師：谷本）

〔3月〕

- ・アイヌ文化講座（幕別町、幕別町教育委員会と共催）  
調査報告：山田伸一氏（北海道開拓記念館学芸員）  
記念講演：小谷凱宣氏（名古屋大学大学院教授）
- ・共同研究「カムチャッカ半島民族芸能調査コリヤクとアリュート」（ロシア連邦共和国／参加：谷本）
- ・『センター研究紀要第4号』発行
- ・『ポン カンピソシ3（イペ 食べる）』発行
- ・『センターだより第8号』発行

## センター刊行物のお知らせ

- ・『ポン カンピソシ3（イペ 食べる）』

アイヌ文化紹介小冊子の第3冊目です。アイヌの伝統的な食生活について、食料の調達方法と調理や保存の方法について取り上げました。その中で魚や山菜を使った料理の作り方を幕別町に住む安東ウメ子さんから教わっています。

- ・『北海道立アイヌ民族文化研究センター  
研究紀要 第4号』

以下にテーマと執筆者を紹介します。

- ◇論文 東京国立博物館のアイヌ民族資料（下）  
佐々木利和
- ◇論文 ハリギリの丸木舟 民族誌資料/考古資料/  
口承文芸資料にもとづく一考察 本田 優子
- ◇調査報告 小川シゲノから上田トシへの伝承2  
大谷 洋一
- ◇調査報告 チカラカライミの模様のいわれ  
澤井 春美
- ◇資料紹介 幌別におけるアイヌ学校設立申請関係  
資料 小川 正人
- ◇資料紹介 織田ステノのイコペパカ 奥田 統己
- ◇論文 アイヌ語静内方言の後置副詞 奥田 統己

当センターの研究紀要は、大学、博物館、研究機関、都道府県の主要な図書館、アイヌ文化に関係する機関等に配布するほか、従来と同様に北海道行政情報センター（道庁別館3階）にて有償頒布しています。

編集・発行 **北海道立アイヌ民族文化研究センター**  
〒060-0001 札幌市中央区北1条西7丁目 プレスト1・7 5F  
Tel. 011-272-8801(代) Fax. 011-272-8850  
開館/月～金 9:00～17:00 休館/土・日・祝